

近畿病院図書館協議会第118回研修会

研修部

日 時：2008年12月6日(土) 10:00~17:00

場 所：刈谷豊田総合病院 教育研修センター

テーマ：病院図書館の課題：研究支援

プログラム：

1. 総合病院の図書室における歯科医学書について

刈谷豊田総合病院 歯科口腔外科部長
宇佐美雄司氏

2. 図書館によるビジネス支援サービス

—その医療分野への応用可能性を含めて—
国立国会図書館 科学技術・経済課
企画運営係長 小澤弘太氏

3. 病院における看護教育について

刈谷豊田総合病院 看護部教育担当師長
石川真理子氏

4. 施設見学

参加者数：21名

(うち東海地区医学図書館協議会会員8名)

今回は、会場施設が東海地区の会員であったことから、東海地区医学図書館協議会に開催の後援を要請し、快諾をいただいた。開催案内文書の発送は、当協議会会員と東海地区医学図書館協議会会員宛に行った。

<総合病院の図書室における歯科医学書について>

図書委員長でもある講師は、病院機能評価の受審を緒に充実を図ってきた病院図書館の変遷について語ってくださった。確たる方針をもって、段階的に、着実に図書館整備がなされてきたことがよく理解できた。

講師が所属する診療科の「歯科口腔外科とは何か」というお話では、病院における歯科医療部門の開設状況に始まり、一般にも医療者自身にも理解されがたい現状があることを指摘された。歯科医療に従事する職種別にそれぞれの専門分野を説明してくださったが、大学などの教育機関によって、その講座名が異なることを知り、驚いた。

病院図書館に整備すべき学術雑誌についての評価は一読者としての視点を交えていたので、とても興味深く拝聴でき、自館の選書にも生かせると思った。

書籍の分類法については、NDCとNLMCとの比較について説明された。どちらがよいのではなく、複数の診療科により共同でなされる治療のためには、利用者と情報交換し医療の内容を把握した上で分類することと鮮度を管理する必要があるとのことであった。

<図書館によるビジネス支援サービス

—その医療分野への応用可能性を含めて—

3部構成で話を進めていただいた。

第1部：図書館によるビジネス支援サービス概論

ここでは、貸出中心主義から脱却するための転換点として、課題解決型サービスの端緒となるビジネス支援サービス概念が紹介された。具体的な情報発信方法としては、Web上のパスファインダー、レファレンス事例集、メールマガジンのほか、各地の図書館で連綿と構築され続けている各種データベースなどが語られた。国立国会図書館が協同事業として行っているレファ

レンス協同データベースに、病院図書館も参加すべきであるとの指摘には少々面食らったが、自身のレファレンス体験を思い返すうちに、医療系図書館として寄与することが少しはあるのではないかと思えた。

第2部：国立国会図書館におけるビジネス支援サービスの実際

図書館の図書館として非来館型サービスのみを行っているものと考えていた国立国会図書館だったが、予想外の側面を多く知り得た。

一見すると、Web上での情報発信で事足りるように考えられがちだが、来館者に直接サービスを行うことは非来館型サービスとの相乗効果が期待されるようだ。また、複雑で膨大な量のレファレンス事例を有効に活用する目的で、課内研修を実施しているという。一人職場の病院図書館では実施困難なことだが、年数回行っている勉強会などに取り入れていきたい手法である。

第3部：ビジネス支援サービスの、病院図書館による医療情報提供サービスへの応用

第1部でも指摘のあったレファレンス事例の集積が有用であるとのことだった。また、医療系図書館員の一部で担っている診療ガイドライン作成への参加を高く評価してくださっていたが、普遍的なスキルとはなっていないため、平均的な病院図書館はまだまだ発展途上にあると思えた。

<病院における看護教育について>

看護教育全般についてお話いただいた。まず、看護師養成機関での基礎教育については、その機関によって卒業時の力量にかなりの差が生じることが指摘された。だからこそ、入職しからの継続教育・卒後教育が必須になるわけで、その教育支援は、施設全体で充実を図らなくてはならないとのことである。講師の所属施設で実施している教育プログラムについて順を追って説明していただいたのだが、日常的に目や耳にする「リーダーシップ」「プリセプター」

など、普段私たちが看護用語として難解に感じていた用語について、講義の終盤には少しは馴染むことができたように思った。これらの教育支援の大きな柱のひとつとして「図書館の充実」があげられていたが、これは今回の病院図書館員向けのシナリオというわけではなく、実際に病院図書館員が看護教育に携わっている経過を踏まえたものである、ということに改めて感動した。

このテーマは、今後の会誌に特集が組まれる予定であり、発行が待たれるところである。

<施設見学>

プログラム1で紹介された図書館を見学した。書庫と閲覧スペースが区分されていて、開放感があった。小規模な病院ではなかなかそこまでのスペースを確保するのは困難かもしれないが、図書館機能は成長していくのが本来のものだ。徐々にでも拡充ができればと思った。患者さんの診療スペースは、吹き抜け構造をエスカレーターで移動するようになっており、いま居る階がどこなのかすぐにわかる。とかく迷路となりがちな病院施設にはない安心感が持てた。

<昼食・茶話会>

近畿圏開催の研修会に比べ、参加人数こそ合わなかったが、遠方より招聘した講師と共に過ごす昼食・茶話会は当協議会ならではのセッションとなり、とても楽しく有意義だった。研修会は、単なる受け身の学びの場ではなく、人と人との交流の場ともなっており、参加者がそれぞれの職場に戻ったときに心強い同士を得た気持ちになれるものである。今後も会員の皆さんの積極的な参加を待ちたい。

(文責：中村雅子)

大阪府立母子保健総合医療センター)